
グレイテイル

めらとにん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グレイテイル

【Nコード】

N3738X

【作者名】

めらとにん

【あらすじ】

言われたとおりお使いに行った周助だが、帰ってきた頃には家が炎に包まれていた。中には両親と姉の由美子がいたはずなのだ。消防員たちの目を盗み、半ば心中目的で助けに行こうとしたが、知っている人物に止められる。

彼は白石。住んでいるところは離れていて、ましてや家を知っているはずのない男である。彼はこう言うのだ。

周助は五年前からずっと眠っていて、これから会う人物を普通の学生として夢で見ていた。本当は秘めた力を持った少年で、その力

を利用しようとする吸血鬼に居場所がばれてしまったため、保護しにきたのだ、と。

何も信じられなかったが、両親や姉も死んでしまった以上、彼に従うしかない周助の行く末は……。

サイトで書いてた二次創作小説を加筆修正したものです。ガイドラインに沿って念のためR15にしてありますが、きつい描写はないと思います。

プロローグ（前書き）

某アーティストさんの曲や世界観に影響されて、いわゆるダブルパロミみたいな感じでやっています。

固定ですがカップリング（大体マイナー）描写も多々あり、女キャラもわりと鼻負しているので、地雷がある方にはおすすりめできません。

一応メインカプは白石×不二（兄）の仕様ですが、二番手くらいに天根×淳（本命）です。

少し鬱グロ風味かもしれませんが、あくまで“風味”なので大したことはありません。

プロローグ

眠らせて数年くらい。

もう守るには限界だ。

コールドスリープさせていた、弟の頬を撫でる。

綺麗でよかった。

これならば、万が一、悪しき者の手中に入ったとしても。

永に祈る事が出来たならば、ずっと二人の弟を見守りたかった。^{とこしえ}

けれども、それにはもう時間がない。

氷は溶ける。

眠れる美少年は体温を取り戻してゆく。

その衣服のポケットに、水晶の付いたペンダントを入れた。

どうか、何があっても、その優しさを忘れずに生きていて欲しい。
。

そんな、けがれのない、無垢なる祈りは愛しき者のもとへ。

「周助」

揺らぐ炎は幻影なのか。つい先程まで過ごしていた屋敷は紅に包まれている。何が起こったのかさえ解らず、花を買ったために家を出た少年はただ立ち尽くすだけだった。

握っていた薔薇の花が地にゆっくりと辿り着く。手足が奮え、落ちた花を再び握る力さえ失った。

いくら叫んでも炎は消えやしない。せめて中にいる家族だけでも助けられないかと、灰になりゆく屋内へ駆けて行こうとした。もしこのまま取り残されて一人になってしまいうくらいならば、いっそのこと。

「待ちや」

だが、せめて一緒に逝くことさえ許してもらえなかったのか。華奢な腕が何者かに掴まれる。何を考えていたのか、振りほどいてまで炎の中へ行きたかったが、いくら必死にもがいて解こうとしても、強い力のもとでは逃れられもしない。

頭の何処かでは解っていた。街でこれだけの火災があれば 現に周りの人々も消火に励んでくれている。それでも野次馬は囁いているのだ。こうなってしまうばもう駄目だ、と。

まるで天罰のように燃え上がる炎は、付近に飛び火させないくらいには留めることが出来たようだが、それでも何の恨みがあるのか、まだ家を燃やし続けた。

自分が何をしたというのか。家族が何をしたというのか。平凡かつ幸せな家庭だったとしか言えず、答えは思い付きもしない。

「どうして！ 止めないで……っ!？」

やり場のない怒りを、後ろから引き止める者にぶつけようとした。止められなければ、これから先一人で生きていき、悲しむことも考えなくてよかったのに。

だが、振り向いてその顔を見た途端、言葉を失った。今までに一

度だけ、その男に会ったことがあるのだ。そんなに親しい間柄でもなければ、同じ地に住んでいる訳でもない。そんな彼が何故、此処にいるのだろうか　驚愕してとっさに声も出なくなる。

「説明して、謝りたい……一緒に来てくれへんか？」

男は至極申し訳なさそうな顔をする。

その言い草からすると、この火災は彼の仕業なのだろうか。家族が焼き殺されるのも、一人きりで生き残ってしまうのも。

心底からのやり場のない怒りが、目の前の男に向けられるのが自分でも解った。けれども真摯な瞳を見ると、ついて行く価値はあるのではないかと悟る。理由があるのならは何でもいい、とにかく聞きたかった。家族には罪はないのだと、改めて認識するためにも。

彼は白く、まるで狼のような青年だ。今風の服装ながら、左手には何故か包帯を巻いているという、少し不似合いな格好をしている。そんな青年に連れられるまま、人目の付かない場所に来た。街のはずれにある、家から近い高台だった。

というより、気が付けば彼に付いて行っていったようなものなのだ。思い返せば、何と返事したかさえ覚えていない　いや、言葉さえ発したのかどうかも　。それくらい動揺していたのだ。

かなり遠くまで走ったと云うのに、彼は息ひとつ上げていないようである。見上げると、同じ人間にしては何もかもが完璧すぎている気さえしてきた。しかし、人間でなければ何なのか、その答えが出ないために、人間だと認識する以外になかったただけ。

前に一度会った時から、そんな違和感はあつただけだ。

「何、なの」

周助は息を切らして言った。もうこれ以上走れる自信はない。

「吸血鬼って、信じるか？」

端正に整った顔が向けられる。この状況下である上に、冗談にしては笑えない。子供でさえだませない迷信である。こちらとて、理由も知らず家族を失ったのだ。事故かも知れないが、それにしても昼間なのに誰一人逃げられなかったのがますます不審である。余計

に目の前の彼を疑わざるをえなくなった。

もつとも、犯人が彼だとして、動機はなにひとつ見つからないのだが。

「意味、解らないな。僕はそんな話、しに来たんじゃないよ」

普段怒りをあらわにする事は殆どと言っているいいほどにないが、今回ばかりはそうはいかない。

「ふざけたるみたいやけど、ちゃうんや……不二くん、頼む。聞いてくれへんか」

何をしても家族は帰ってこない。そう考えると震えてしまうほどの苛立ちを覚えていたが、それでも濁りなく真っ直ぐに見据えてくる瞳は変わらなかった。

白石蔵ノ介。知っている。一度会ったことがあるのだ。大阪出身の、テニス部のキャプテン。かなり強い人だ。しかし、彼について知っているのはそれくらいである。

「もし、今までの君の記憶が、守るための偽物やったとしたら……？」

「？ ……有り得るわけがないよ。記憶が偽物だなんて、漫画や小説じゃないんだから。ふざけないでほしいんだけど」

「ふざけてない 由美子さんなら、それが出来たんや」

由美子 由美子は姉だ。怒らせると怖かったが、誰より周助を大切にしてくれた人。両親と同じくらい愛情を掛けてくれた人だ。

接点も特にないの、なぜ白石が由美子のことを知っているのだろうか。

そして、その由美子は今日死んだ。周助に花をかうように言ったのが最期である。悲鳴さえ聞くこともなかったのだ。あの炎が消えた後の焼けた家から、いつか。

白骨に、灰。思い浮かぶまだ見ぬ情景は、頭の中をえぐるように視界さえも塞いでいく。

「姉さん！ 姉さん……っ！」

自分が泣いているのかさえ確認出来ないまま、その場に膝を着い

た。外だということに構ってはいられない。思考能力やその他の感覚さえ奪って行かれるのだ。それだけショックであった。

「君は十三歳になってから、今日までずっと眠ったんや。その間に見た夢の中で、俺を見たやる？ きつと俺だけやなくて、敵の事も……」

そういわれても、今の周助からしたらむしろ白石が敵だとは思えない。まるで最初から家族が死ぬのを知っていた様子なのだ。

「夢？ だとしたら、今まで会った人はみんな夢だったの？ そんな、解らないよ……どうして」

とはいえ、夢だったという心地はしない。夢なんて目覚めた時には曖昧な記憶に変わるのだが、すべてが鮮明な記憶となっている。昨日まで、確かにごく普通の少年として生活していた。

白石が嘘を言っているのか。にしても、もつとうまい嘘があるだろう。

「ああ。せやけど、この戦争で殆どが死んだ」

「ますます胡散臭い答えである。」

「戦争……？ 何処の……」

今の日本は平和で戦争をしないなんて、小学生でも知っている。本当に十三歳の時から眠っていたとしても、周助はまだ十七歳だ。つい昨日まで、普通の高校生活を楽しんでいたのに。

「人間同士の戦争やない……それが、吸血鬼同士の戦いなんや」

二度目に出て来た言葉には、最初のような怒りは込み上げては来なかった。そこまで云われれば、信憑性がないこともないような気がしてくる。

しかし、やはり現実的ではない。吸血鬼なんて架空でしか存在しない生き物なのだ。

吸血鬼というのは、人間や動物の血を吸って生きる化け物らしい。ほぼ不老不死で、綺麗なイメージだ。日本発祥のものではなく、ヨーロッパでの伝説だったと思う。それがなぜ日本にいて、今頃戦争なんて起こしているのだろうか。

ましてや、関係のない周助やその家族を巻き込むなんて。

「だとしたら、どうして僕の家族が？」

自分で聞いたと同時に、ある仮定を想像したら、辻褄が合うのに
気付いてしまう。

「あ……」

もしも、だ。敵とやらが狙っていたのは、家族ではなくて周助自身ならば。家族はそれを知っていて、わざと花を買いに行かせたのではないだろうか。

じゃなければ、このタイミングで一人だけ生き残るなんて変だ。

偶然にしては少々出来すぎている。

「想像ついたか？ 聞くところによると、君は頭がええらしい」

その言いようは、昔から周助のことを知っているようなそぶりだ。
「僕、なの？ 僕が何をしたんだい！？」

白石に飛び付くように突っ掛かる。嘘でないなら、恐らく彼が仕組んだものではない。夢という記憶でも、白石という男は優しい人だった。だとしたら、周助が悪人だから狙われたという可能性も浮上してくるのだ。

もつとも、この話を信じるならばの話だが、今は信じざるを得ない状況であるのも確かである。もし周助が詐欺師だとしたら、こんな変な嘘で今の人間が騙せるなんて普通は考えない。昔、霊媒師やら聖職者やらが目立っていた時代とは違うのだ。

「君は人間やけど、救世主。その力は闇にも光にもなれる……破滅を望む吸血鬼は、君の力を欲しがつとる」

まるでおとぎ話。ファンタジーのような世界の話で白石は始める。
周助は絵本の読み聞かせでも聞かされている感覚だった。

十五年前、一人の少女が物心もつかない二人の小さな子供を抱えて、白石の前に現れた。

彼女の名は由美子。わずか十二歳の少女だったが、二人の弟を連れて逃げるようにと両親から言われたらしい。

彼女にも不思議な能力は備わっていた。白石の 気 という感覚

だけを頼りにやってきたというのだ。だが、悪い吸血鬼は白石よりも先に由美子の両親を特定し、襲ってきたという。

前述で述べたように、由美子の両親は彼女に二人の幼い兄弟を託し、悪い吸血鬼と戦った。しかし、人間である彼らには勝ち目はなく、せき止めることはできたものの、亡くなってしまったらしい（由美子は吸血鬼に限らず知っている人間の生命エネルギーを感知できるため、逃げているうちに両親が死んだのを確認したのだという）。

由美子は強かった。幼くして両親の死に直面しながらも、二人の弟をしつかりと抱き締め、こう云ったのだ。

私はどうなってもいい。どうか、この子供達を守って下さい。十二歳の少女が、普通こんなことは口にしない。彼女は自分の運命をある程度は解っていたのだろうが、それにしても肝が据わっていた。そして、何よりも強い少女であったのだ。

吸血鬼たちの間には言い伝えがあった。西暦が二千年を越えた頃、特別な力を持った少年が現れる、と。彼を挟む二人の姉弟にも力の影響があるだろう、そういった預言だ。白石もまた、父が灰になる前にそれを聞いていた。その姉弟をもし見つけたなら、悪しき者の手に渡らぬ様、守ってやりなさい と。

しかし、ずっと白石の元においては危険だった。戦いは尚も続いているため、いつ巻き込んでしまうかも解らないし、幼子である二人の弟を育てる環境としてもふさわしくない。それに、由美子の所在を確かめに、必ず敵は白石の元を訪れる筈だ。そうできないようには仕組んであるのだが、いつ結界は破られるか予想も出来ない上に守らなければならないものがまだ幼すぎた。

それから色々と策を練り、信頼できる人間の夫婦の子供として、由美子と二人の兄弟を預ける事になった。それが不二家の優しい両親であるということらしい。

話を黙って聞いた周助だが、終わった途端に憂鬱な気持ちが一気に押し寄せてきた。最初は信じていないつもりでも、やがてそれが

真実なのだど認識させられる。そうして守られてきたとしても、見付かってしまつては意味がないのに。

姉の強さも、無意味なものになつてしまつたのだ。

「僕のせいなんだ……」

その次に考えたのは、どうして自分がそうまでして生きながらえているのか。全て失つても、姉ほどの強さは持つていない。いつそいない方が吸血鬼たちだつて争わずに済むだろう。

「由美子さんから久し振りに呼ばれて駆け付けたんに、守れんで……こんなんで頼むのもおかしいんやけど、君と一緒に来て欲しいんや。もつと早く、そうするべきやつたんやろうけど……」

今まで仮とはいえ両親に任せつきりだつたくせに、今更。周助がらすれば、またも苛立つ他になかつた。こうなつた今、無理に生きる意味なんてないのに。

助けられたのに助けなかつた、そうとしか思えなくなつてくる。

何を信じればいいかも解らないのなら、いつそのこと。

「解つたよ」

どうにでもなつてしまえ。

自暴自棄になつてそう答えた。

白石の顔をまともに見られなかつたが、そつと頭を撫でられる。

同時に、そのまま胸の奥にしまい込もうとした感情が、勢いよく押し寄せてきたのだ。

「強いな」

聞いた事のある言葉。そのせいでパンクする。

胸を借りて暫く泣いた。彼に涙を見せるのも、夢の中と同じだ。ただひとつ夢と違うのは、何もかもを失つてしまつたこと。

紅蓮の悪夢は、覚めない現実だつた。

T A L E 2

由美子の夢を見た。知らない匂いにむせ返る。

「姉さん!!」

夢だよ、と言わんばかりに叫んで飛び起きた。確かに由美子は周助の頬に触れ、その名前を呼んできたのだ。

だが、目の前には知らない光景が広がっている。いつからここにいるのか。それさえも覚えていない。

ふと、夢のとおり服のポケットを漁った。今までに漁る余裕もなかったが、指に何かが当たる。掴んで目の前に出してみると、確かにそれは水晶のネックレスだった。

「夢……」

周助の夢がどこまで本当で、どこまで嘘なのかは解らない。ただ、テニスに励んでいたのは全て嘘というか、架空の世界だろう。どうやらあれは現実ではない。

そうだ、裕太はどうしたのだろうか。花を買いに行った時も、裕太の姿はどこにもなかったのだ。

違和感を覚えなかったのは、夢での出来事が周助自身の記憶だと思っていたからだ。つまり、夢では裕太は別の学校の寮にいたから、普段家にいないのは当たり前で。

もしそれも現実と同じなら、裕太はまだ生きている可能性がある。すぐにでも保護しないと狙われてしまうのではないだろうか。急いで白石に伝えなければ。

薄暗い部屋のカーテンの間からは朝日が差し込む。そうして勝手に部屋を出るが、廊下の広さに困惑する。

「おい、お前うつせえよ」

向かいの部屋から待ち構えていたかのように、少年が顔を出して周助を見る。見る、というよりは睨みつける様子だ。赤い髪の可愛らしい顔をした少年 彼も 夢 で見たことがある。

「丸井くん……?」

周助は名前を知っていたから呼んだが、丸井は不服そうに、そして機嫌悪そうに近付いてくる。

「あのなあ、お前は新人りなの！ ブン太様の眠りを妨げるなんて絶対しちやダメだろい！」

子供らしい態度はまるで裕太を見ているようで、罵倒されているのだろうが、どうということもなかった。

「ごめんね。あの、白石は？」

だが、今は彼には用はない。早く裕太の所在を確かめないと。もしかしたら、白石さえも解らないのかもしれない。

「し、白石は上の部屋だよ……。つたく、もう起こすなよ」

夢では接点はなかった筈なのに、丸井は確かに彼を呼んだ。それに少し違和感を覚えるも、廊下の突き当たりにある階段を指し、やはり不機嫌そうに部屋に入っていく。

部屋数がたくさんあるようだが、丸井以外にもまだ住人がたくさんいるのだろうか。仲間と思わしき人が 人間かどうかは別として。

階段を上がると、いくつか部屋があった。仕方なくひとつずつノックすると、一番奥の部屋から目当ての人物は顔を出した。

「不二くん、俺に用か？」

優しいな笑顔を向けられる。が、直視は出来なかった。こんなことから居座らせてもらう申し訳なさと、まだ家族の死へのやり場のない怒りがあるためである。

「うん……」

ぎこちなく歩み寄っていく。あんな態度で接したのに、頼むなんて厚かましい気さえしてくる。それでも、頼れるのは白石しかないのだ。唯一の弟を死なせるわけにはいかない。

「裕太のこと、だけど」

途端、優しくなった白石の表情が固まるのが解った。ずっと見つめていた訳ではないが、雰囲気ですれを感知する。

聞いてはいけない事なのだろうか。もしかして、裕太の存在自体が夢だった？ いや、そんな筈はない。確かに、先日の白石の話では、周助を挟む二人の姉弟という言葉が出てきた。姉が由美子なら、弟は裕太しかいないのだ。

ふと、突然に白石は頭を撫でてきて、同時に視線を合わせて腰を落としてくる。

「裕太くんは……俺が探しとる。今は何処におるか解らんけど、生きとるのは確かや。心配いらんで」

それが真であるか、偽であるかの確証はない。しかし、周助はそれが嘘だと感じ取った。思うに、白石という青年は嘘が下手なのだ。だが、これ以上追求してはいけない気がした。どうやら、裕太が生きているのは本当らしい。それだけはくみ取れる。嘘なのは、他の言葉の中のどれかであろう。今は受け入れるしかない。無事ならば、それで構わないのだ。

「お願いね。それと……」

昨日の事を謝ろうとした。何にせよ、動揺と悲しみ、それに怒りでひどく当たってしまった。どんな理由でも、傷付けてしまったかもしれないからだ。

彼が悪い人でないと、やっと心の底から思えたのだ。裕太のことをきっかけにして。

「白石！ 大変や！」

しかし、ドタバタと階段を駆け上ってくる音と、共に発せられる大声によって掻き消される。

白石と同じ喋り方。大阪の人間か。だとしたら

「不二くん、元気しottaんやな……」

先程まで大声を出して焦っていた彼だが、周助の顔を見た途端に安心したような表情を見せる。

彼は忍足謙也。夢では確か、走るのが速かったつけ。周助とはやはり関わりは殆どない。それがこの世界。悲惨な現実の中では不思議と縁があるようだ。

「どうかしたんか？」

せつかく言おうとしたのだが、謙也が彼に用があるなら仕方ないだろう。周助は黙って見守る事にした。

「それが、食材が足らんのや……ブン太の奴がつまみ食いしよってからに。まったく、あれやから太るんやって」

かと思えば、そんなに重要な事ではないようだ。そして、どうやら吸血鬼でも太ったり痩せたり現象はあるらしい。

「じゃあないな、好きなもん買って来い」

呆れたように言う白石。周助に対しての他人行儀っぷりとは違い、本当に古くからの友人と接するような態度である。

「じゃ、不二くんも連れてってええか？」

すると、謙也は嬉しそうに周助の肩を抱いてきた。話を遠目から見守っていたつもりだったために困惑するが、最初からそのつもりだったのだろうか。何か二人で話したい事があるようにも思えてくる。

「お前なら襲われても逃げ切れるやろうって信用はあるんやけど、不二くんはまだ、昨日の今日で疲れとるんやで……」

白石はそんな謙也の様子も悟っているようだったが、同時に周助にも気を遣ってくれているようだ。

だが、ずっとこの中にいたら考え込んでしまいそうで。それならば少しだけでも、現実から逃避したいという願望もあるにはあった。何か楽しいことがしたい。

「僕なら大丈夫。久し振りに目が覚めたんだもん、行きたいな」

そうして振る舞うのがいいものだと思っただけで納得する。これから、彼らには元気なように見せよう。そうやって振る舞っていれば、忘れられるような気さえする。

しかし、内心では押し潰されそうだった。今頃、家だった場所は燃えかすになっっているに違いない。両親として本当の子供のように育ててくれた人達も、大切にしてくれた実の血を分けた姉も、灰と成って風を彷徨っているのだろうか。

考える度に怖かった。だから表面だけでも平常で、明るい少年であるうとしたのだ。

「ほらみい。じゃ、買い出しや！ 炊き出しも手伝ってくれるか？ 俺がやらんと誰もやらんからなあ」

謙也という人の評判は、夢の中でもよかったと思う。友人思いで優しい少年だと誰かが言っていた。それならいいやつ同士、白石と仲がいいのも頷ける。

「うん」

どうやら、夢の中で学校の括りはあったものの、現実世界では殆ど関係がないようだ。あまり関わりのなさそうな丸井もいることから、それはうかがえる。

これから会う筈の人物をランダムで出しただけの夢なのだろうか。その辺りの由美子の意図はよく解らないが、現実とリンクしているところとそうでないところはあるようだ。

すぐさま謙也に腕を掴まれて外に出る。街並には人間達が当たり前のように通勤や通学のラッシュに追われているようだ。飛び交う会話のイントネーションから、此処は東京ではないことが解る。

時間はかかるが、ゆっくり歩くのは好きだったため、なんだかリフレッシュできたような気がした。

「ねえ、あそこには何人住んでるの？」

歩いているうちに、それが少し気になった。あんなに部屋数はあったものの、人がたくさん住んでいる気配はなかったのだ。

「五人、それと君が入ってきたから、今は六人だな」

予想よりも遥かに少ない数に驚愕する。

「たったそれだけ……？」

人里は離れているが、あんなに大きな屋敷に住んでいるのに。それに、それだけで戦うのは無防すぎるように感じる。戦争といえどもっと大規模で、何千も何万も人がかり出されるものだという偏見があったからだ。

「昔はもつとおったんやけどな。みんな死んでいくんや。俺らもい

つ死ぬやら解らんけど……それでも、白石の意思に惚れ込んで戦つとる。あいつがおらんと、今頃君も悪いやつに使われて、世界はまともやないやろうな。もうこんなの終わりにしたいんやけど、なかなかそれが、叶わんっちゆう話やな」

世界のために白石たちは戦っていると言つのか。それにしても、人間たちは何事もないように過ごしている。

周助も、つい最近まではそうだった。

「君たちも吸血鬼？　なのに、どうしてそこまでして世界を……？」
人間たちを守る理由が見つからない。白石以外の四人は彼に惚れ込んでいるのなら、その白石自身は果たしてどうなのだろうか。偽善者でも、ナルシストでもないだろうから、自惚れからくる自己満足ではなさそうなのだ。

「人間と共存出来る世界を望んどるんや。昔、白石の父さんが死ぬ前は、人間とも共存出来とった……若干、差別はあつたけどな。それでも、世界を統べる王やつてん、ええ方向に向かつとったのに。今は悪いやつに支配され、意図的に人間たちに歴史から消された。それでも、まだ微妙に人間たちの記憶に残つとった時期には差別されて、家族を殺された吸血鬼も少なくはないんやけど。せやからつて、復讐しとつたら悪いやつらと同じやろ？　歴史に隠されとるけど、あいつは誰よりも民を愛する王なんや。悪いやつでさえ、救おうとしとる」

その話を聞き、ある程度は把握出来た。きつと人間の中でも偉い人が、悪いやつと手を組むなどをして、都合が悪いからと存在を消していったのだろうか。

それと、謙也がどれだけ白石を慕っているかも伝わってくる。

「彼、すごい人なんだね」

ただそういつた話を聞いただけで、事のすべてを把握できるのは少し違つが、納得はいく。謙也たちが彼を慕ってついでに行くのも、死んだ戦士たちが命を張つてまで尽くそうとしたのも、それなりの理由があつてのことなのだ。

それに、何より由美子が白石を信用していた。もし白石が悪い吸血鬼ならば、とつくに周助は利用されているだろう。それにかかわらず、白石はただ気遣ってくれているようで、裕太の事以外はちゃんと説明もしてくれた。裕太のことだって、傷心している周助を気遣って敢えて言わないこともあったのだろう。もしかしたら、敵にスパイとして潜り込んで戦っているとか……考えられないことはない。

白石を嫌う理由なんてないのだ。改めてそう感じさせられる。

だからこそまた、どこに感情をぶつければいいのかが解らない。何を恨めばいいのだろうか。

普通の人間のように買物物を済ませた二人は、店を後にする。吸血鬼であるがゆえに、血のしたたる生肉は欠かせないようだ。

「なあ、周助って呼んでもええ？」

買物袋を掲げる謙也は、唐突にそう言って微笑んできた。

同じ学校に通う友人にすら下の名前で呼ばれた記憶はないから、少し戸惑ったのだが。

「うん。じゃあ、僕も謙也くんって呼ぶね」

彼が掲げている袋からは、食材と一緒に甘いお菓子がたくさん覗いている。裕太がいれば喜んだだろう。そう、余計な事を考えてしまった。

「かわええやつちな、周助！」

くしゃり、と頭を撫でられる。

小さい頃から男友達にもそう言われる事が多かったため、大して気にはならない。

それでも、同じ事をよく言われていた裕太はよく嫌がっていたっけ。兄貴と一緒にするな、とか、男に可愛いつて言うな、とか。

そうやって、朝の忙しい時間に混み合う街を、二人は急ぐ様子もなく歩いていった。歩幅が小さい周助に合わせてくれる謙也は、それでいて周囲を気にしている。

いつ周助の家族を殺した敵が現れるか予測も出来ないのだ。

吸血鬼は目の前にいる謙也もそうだが、人間と殆ど変わらない容姿をしている。それでも上手く言うならば、普通の人間よりも綺麗な容姿をしていると言えるだろうか。

白石は特にそうだ。それから朝に見た丸井、今いる謙也も。あと二人の仲間が誰なのかはまだ知らないが　おそらく綺麗であるには違いない。

そうしていると、急に謙也に腕を捕まれた。庇うように抱きしめられると同時に、人間達の悲鳴が聞こえてくる。

よく見えなかったが、すごい勢いの風と共に、謙也の頬から血が滴る。が、すぐにその傷は何事もないように癒えていった。

「何や、気付いとったんか、謙也さん」

真上から声がする。空を覆っていた謙也が少し離れ、視界が明るくなった。

ゆつくりと、少し離れた場所に舞い降りてきたのは、謙也と仲のいい筈の少年だった。

「周助、これ持って走るんや。来た道、解るか？」

しかし、謙也は動揺する様子もなく、周助に買い物袋を渡す。そして、黒髪でピアスを付けた少年を振り向いて見たのだ。

方向オンチではないから、帰り道は把握出来る。人里離れていたが、複雑な道ではなかったのだ。

「それは解る。でも、謙也くんが……」

刻々と近寄ってくる。

財前光。彼に対しての印象もそこまで大きくないが、それにしても残酷な目をしている。こんな少年ではなかった記憶だ。もっと、確かに無気力そうではあったが、子供らしいというか。それも夢であるため、印象でしかないのだが。

「俺なら大丈夫や。白石にはすぐ帰るって言っといてくれな」

それから謙也が立ち上がると、彼らは向き合った。

一方で、周助は脚が竦む。荷物を持たされた手は、重くもないのに震えて仕方がない。

「何や、もう見付けてもうたわ」

財前は周助の存在に気付いたようだ。殺されるのだろうか。

「そつや、言つとくが、アンタの弟」

意地悪そうに笑い、財前がそう言いかけた瞬間だった。

「うるさい！」

途端に地響きがして、続きの言葉が聞こえなくなる。

これが謙也の能力なのか。呆気に取られた周助だったが、そのお陰で現実に引き戻された気がした。

逃げなければ、邪魔になる。

そして、早く白石を呼んで来よう。

「ごめん！」

財前の言葉も気になったが、何を言つて惑わせてくるかも解らない。今は早く、誰かに助けを求める以外になかった。

振り返りながら来た道を急ぐ。

仲間がレイピア 鋭く尖った剣に屈する姿。街の中心で、黒い翼を生やした少年に抱き上げられ、攫われて行く。

そんな様子を見てはいられず、それでもどうしようもなく、周助はただ走り続けた。

息を切らし、ついには吐いてしまいそうなくらい走り、ようやく人氣のない大きな屋敷に辿り着いた。

待つていた白石に急いで事を伝えようとするが、息が続かずに上手く伝えられない。

それでもやっと伝え、財前の名を告げた。白石はただ、謙也は絶対に死なないからと言っただけで、周助を丸井に委ねては屋敷を飛び出して行った。

数分もすれば白石は服をボロボロにした謙也と一緒に帰って来た。吸血鬼だから傷が残らない。しかし衣服だけはそうにもいかないように、謙也は呑気そうに笑っていた。

帰ると見た事のない仲間の存在も知れたが、その彼は丸井と同じく、何事もなかったかのように謙也と接している。謙也自身も、ちよつと転んだくらいだと言わんばかりに料理をし始めた。

丸井と謙也は明るく喋る子だが、もう一人の 幸村精市は比較のおとなしい。あとの一人は、誰かとまでは訊いてはいないが、今はここにいないようだ。何とも言えない組み合わせにも驚かされるが、そんな彼らの絆を繋ぎ止めている白石だからこそ、あんな状態だった謙也を連れ戻せたのだろうか。

それに、財前は死んだのだろうか。

その夜は、もう一度白石の部屋に行った。今度こそ、謝りたくて。「不二くんか？」

ノックしただけで気配を感じ取ったのだろうか、見事に名前を言い当てられた。

「解るの？」

ドアを開けて訊く。部屋には月の光が降り注いでいる。光の具合からして、今日はちょうど満月のようだ。虫でも飼っているのか、あるいは飼っていたのか、水槽のような容器には土が盛られているが、土の上には何もいない。

「大体はな」

そう言つて微笑む白石だが、もし謙也を失っていたら、こんな風に笑つてはくれなかつただろう。生きていてくれてよかったと周助は思うが、周りはそれを当たり前のように受け入れていた。

「そつか。あのね、君に言いたい事があるんだ」

そして、言おうとしていたことを思い出す。回りくどいよりはストレートの方がいいだろう。月光を浴びる美しい青年の姿をした吸血鬼に、少しだけ近付いた。

「酷いこと言つて、ごめんね。君を知らなかつたのに」

僅か一日程だが、白石がいい人だというのは痛いくらい感じられた。酷いことを言つてしまった周助でも、何もなかつたように受け入れてくれたのに。

「ええんやつて。怖がらんでこうして話してくれるだけで、俺は嬉しいんやで」

確かに、怖いとは思わなかった。

「でも、それは……僕だって普通とは違うんだし、君の姿は人間と変わりないから、だと思っ」

彼がまた化け物のような姿をしていれば、拒否するどころか逃げていたかも知れない。だから、周助は普通に対応をしたに過ぎないのに、それが嬉しいと受け取られるとは思わなかった。

「謙也が戦うの、見たやろ？ 吸血鬼の体には傷は付かん。でも、君が関係なく受け入れとつたのは、優しいからなんやつて。普通な、自分と違うものには少なからず拒絶反応を示すんに……君はただ、謙也を心配しとつたやろ」

それについてはどうなのだろうか、自分でも解らない。ただ、吸血鬼であつても人間であつても、同じように感情を持っている。

「変わらないじゃない。謙也くんは人間じゃなくてもいい人。君も……そういえば、財前は死んだの？」

もうひとつの疑問を思い出した。謙也が帰ってこられたのは、何かしら決着が着いたからに違いない。だとしたら、白石が謙也に代わって財前を殺したのだろうか。

「財前は死んでない。ほら、敵の仲間の癖に、君に興味はなかったやろ。あいつは謙也が欲しいだけ……せやから、謙也も死なん。けど、その度に謙也は傷付けられとるし、俺も他の仲間もそれを知つとるけど、あいつはそれでも明るく振る舞うからな」

知らなかった謙也の境遇に言葉を失う。欲しかったって、何をされたのかは大体想像がつく。そして、おそらく今日のが初めてではないのだ。それが解っていたにかかわらず、周助を逃がしてくれた。気付いてあげられなかった。無性にそれが悔しくて。

「早く、こんな戦い、終わればいいのに」

目覚めてから悪夢ばかりだ。これなら夢にいた方が楽しかった。むしろ、この現実が夢なのではないかと、今でも思いたくなるくら

い。

「俺が終わらせる。そしたら、君も自由になれる。今だけ、堪忍してくれな」

そんなつもりはなかったのだが、白石にまた急がせてしまった。申し訳ない気持ちの反面、本当に終わらせて欲しい気持ちもあり、相槌を打つしか出来なかった。

だが、終わったとして、周助に行き場はない事に気付く。せめて裕太が生きているなら、それが救いになるだろう。そうでなければ、戦いが終わっても。

それぞれの情念をよそに、真夜中の月はただ光り続ける。

ふと思った。吸血鬼というものは、太陽が苦手なのではないだろうか。それにしても、白石も昼間に現れたし、謙也も朝っぱらから出歩いていた。生活リズムが人間と変わらないのだ。

そんな疑問を抱きつつの朝、周助は起きて食事の支度をした。残りの一人がいつまでも帰って来ないから、自分を含めて五人分の食事でもいいようだ。

いつもは謙也の仕事のようだが、何か自分に出来る事はないかと考えた時、せめてこれくらいはと思い、彼よりも早起きをするに達したのだ。

「謙也あ、今日はホットケーキがいい」

そして、珍しく最初に起きてきたのが、白石を除く四人の騎士の中で一番子供っぽいブン太だった。もつとも、周助はあと一人とはまだ面識がないし、名前も聞いてはいない。その四人の騎士が一体どんなふうにならうのかも、謙也の戦いくらいしか見たことがないため、彼以外の能力は見当も付かなかったのだが、印象を述べるのならやはり一番幼いというに値する。

「なんだ、今日はお前かよ」

初日からブン太にはあまりいい印象ではなかったのか、彼だけは数日経った今も、あまり周助を歓迎してくれていないようだった。よほど起こしたのを根に持たれているらしい。

「おはよう。ホットケーキか、いいね」

だが、周助はさほど気にも留めていなかった。まだ何にするか決めてなかったから、それでいいかと判断する。

「マジ？ お前意外といい奴じゃん！」

そうすると、彼は態度を一変させてはしゃぐように笑った。ただ、それだけの事でやっとな无邪気な笑顔が見られたのはよいが、お菓子に釣られて敵に騙されないか心配になってしまう。

「丸井くんも吸血鬼なんだよね？」

支度を始めながら、周助はそう言った。他の吸血鬼達は綺麗で、確かにそう言われればそんな感じがしないこともない。しかし、ブン太も確かに顔は綺麗だが、他の吸血鬼と比べて幼い気がするのだ。それに敢えてだけ言うならば　少しぽっちゃりだ。

「そだぜ。え、見えねえ？」

冷蔵庫から勝手にジューズを漁りながら、無邪気かつ愛らしい顔でブン太は言う。

「うん、ちよつと見えないかも」

周助もそこは正直に返す。さすがにぽっちゃりだとは言わなかったのだが。しかし、他の子と比べれば、というだけなので、少し丸っこいくらいのブン太はやはり可愛らしくも思える。

「ま、他の奴らは年季入ってっからな。見た目はみんな同じくらいだけど、俺はまあ、一応生まれたのは最年少だし。てか、何でそう呼んでんだよ。ブン太って呼べって」

どうやら、懐くとすごく可愛げのある子らしい。甘いもの好きのところとか、裕太と似ている点も数多く見られる彼に、どこか懐かしさを感じていた。

「じゃあ、ブン太くん」

名前で呼ぶのに変な気がするの、謙也の時も同じだった。夢の中で殆ど接点がなかった分、こうして話しているのも不思議な感覚なのだ。

「周助だっけ、お前ってさ、幸村と淳を足したみたいだよな。落ちて着いてるっていうか」

幸村は知っている。しかし、木更津淳だったか、その名が出たという事は、夢の中で裕太の先輩だった美少年が、今は不在である四人の騎士の一人なのだろう。

「そうかな」

その点、やはり自分でもよく解らない。似ていると言われればそうかも知れないし、違つと言われれば違つのかも　それを言えば、

誰が相手でも当て嵌まるわけで。

「俺が何だつて？」

そんな話をしてしていると、次に幸村が降りてきた。伝説どおりの蒼白な肌に黒い髪は、吸血鬼そのものの容姿である。背は高くすらりとしていて、華やかな女性のようでもあるのだ。

周助が見た吸血鬼はまだ数少ないものの、彼が一番儂げで弱々しい印象を放っている。吸血鬼と呼ぶにふさわしい外見である。

「幸村と周助が似てるって話！　なんかさ、兄ちゃんが増えたカンジ……兄ちゃんじゃないんだけどさ」

ブン太が幸村に接する態度は他の人とは少し違う。慕っているとつか、まるで本当の兄弟のようなのだ。もちろん、本人が後付のように言ったとおり、本当の兄弟ではないようなのだが。

「ブン太、それ、淳にも言ってただろ。落ち着いてるとみんな俺みたいに見えちゃうのかい？」

おっとりとした口調で幸村は言う。彼の場合、落ち着いているというよりは、天然な気があるようなイメージだ。ぼやぼやとしていて、ふんわりともしていると言うのだろうか。言葉では表現しにくい人物でもあると思う。

「だって、似てんじゃないよ。おーい、謙也！　お前だってこいつらが似てるって思うだろい！」

そんな話題で盛り上がる中、ブン太が上から降りてくる途中の謙也を呼んだようだ。彼はゆっくり階段から降りて来ると、きよとんとした顔で周助を見た。

「早いんやなあ……」

その筈だ。普段なら、謙也が一番早く起きて朝ご飯の支度をするのだが、今日はもうホットケーキは木製のテーブルの上に全員分用意されているのだから。

謙也が驚いている様子を見るのは周助も楽しかった。少しは役に立てたろうか、とわくわくするのだ。とはいえ、謙也には料理の腕は劣ることを自覚していたから、暫くは彼から色々習うべきな

のかもしれない。

「てか、何や。周助と幸村が似とるって？」

そして、欠伸をしながらもブン太の話も拾ったようだった。謙也は調理器具をざっと洗う周助と、椅子に座ってぼんやりと微笑む幸村を交互に見て比べる。

「まあ、幸村よりは淳と周助の方がよく似とる気がするけど。幸村はなんか……ちやうやろ」

それが率直な彼の感想のようだ。

ブン太は幸村のことが大好きらしい。大好きなものと嫌いなものを一緒にすることなんてまずありえないから、そう言われたということは好かれたと受け取っていいのだろう。それを考えると、周助は安心することができた。そして、もう一人無邪気な弟ができたような感覚で、なんだか嬉しくもなる。

「朝から賑やかやな」

そんな話をしているうちに、やっと白石が降りて来て、微笑ましそうに四人を見た（本当なら彼が一番早起きであるようだが、毎朝何かしらトレーニングをする変わった魔物であるため、一番遅れて食卓に着くらしい）。こうして見ると、やはりリーダーの風格があるように思えた。

「やっと来たな！ 早く席に着けよ。みんな揃ってご飯って言ったの、お前だらいい」

ブン太はそう言って、ようやくホットケーキにありつけるよう嬉しそうだった。

俺もな、大切な女の子を亡くしてん。それ以来、できるだけそれまで以上に仲間を大切にしようと思ったんや。それで、ああいう決まりを作ったんやで。

ご飯はみんな揃ってから という決まりは、白石が一番大切にしていた少女が死に、たった四人になってから彼が言い出した事であるらしい。そう自ら語っていたのだ。その少女がどんな子だったのか、周助には怖くて訊けなかった。白石のトラウマであろう事を掘

り返そうとしたくなかったのと、自分だけが大切な人を失ったみたいな言い方をしたのが、恥ずかしく思えたためである。

そういった中でも、ブン太は食卓を盛り上げる。彼は明るい子であり、いるだけで場の雰囲気明るくする。白石や謙也も明るい性格なのであるが、ブン太に比べれば少し大人びている気がした。

そして、幸村は確かに落ち着いていて、それでいてどこかゆるやかで優しい人なのだ。

淳と周助が似ているか、それについてはどうか解らないが、こちらは何となく確信した。幸村という少年は、周助自身に似ているというよりは、むしろ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3738x/>

グレイテイル

2011年10月29日01時14分発行